

## 第2回 KEK 放射光ワークショップ開催報告

会長 平井光博  
 戦略・将来計画担当幹事 腰原伸也  
 庶務幹事 近藤 寛  
 行事幹事兼書記担当庶務副幹事 植草秀裕

昨年9月に開催された第1回に引き続き、第2回 KEK 放射光ワークショップが量子ビームサイエンスフェスタの前日、3月13日の午後に開催されました。半日の会期でしたが、皆様方のご協力により、約180名の参加者を得て無事終了できましたことに、心より感謝いたします。

KEK 放射光計画は、PF ユーザーを中心に、PF スタッフ、産業利用関係者、量子ビームマルチプローブ関係者、他の放射光施設などからの外部有識者が加わって組織された PF-UA の三つの KEK 放射光検討委員会（運営形態、ビームライン、ビーム利用）と PF 内に構成された KEK 放射光検討ワーキンググループとの連携によって推進されています。（KEK 放射光検討委員会の設置目的、各検討委員会の構成とミッション、メンバーなど、PF-UA のホームページに掲載しています。[http://pfwww2.kek.jp/pfua/katsudo/pfua\\_housyakou.htm](http://pfwww2.kek.jp/pfua/katsudo/pfua_housyakou.htm)）

2日間の日程で開催された第1回のワークショップでは、ユーザーからのサイエンス提案を含む形で準備された KEK 放射光 CDR（Conceptual Design Report）暫定版 ver.2.1 を元に、KEK 放射光ビーム利用検討委員会の世話人が中心となって、各サイエンス領域の分科会に分かれて CDR に掲載するサイエンスについての熱い議論が行われました。そこでの検討結果を踏まえ、昨年10月31日には、KEK 放射光 CDR ver.1 の公開に至りました。その後、第2回 KEK 放射光ビーム利用検討委員会（昨年12月21日）では CDR ver.1 の改訂に関する協議が行われています。また、施設側からは、2017年度に KEK 放射光 TDR（Technical Design Report）の作成を行うという予定が示されています。



図1 会場の様子

そこで、今回のワークショップは、現在および将来の利用者にとって極めて重要な施設運営に関する議論を深めて CDR の改訂に反映させるとともに、CDR に提案されているサイエンスの実施に必要なビームライン（エンドステーション）の検討のための情報共有と議論を行い、TDR の作成へ向けたスタートアップとすることを目的として開催されました。ワークショップのプログラムは下記の通りです。

### <第2回 KEK 放射光ワークショップ>

日時：平成29年3月13日（月）

場所：つくば国際会議場

#### プログラム（敬称略）：

- 13：30-13：40 PF-UA 会長挨拶（平井光博）
- 13：40-14：00 KEK 放射光計画の実現に向けて（村上洋一）
- 14：00-14：30 CDR ver.1 「施設運営」の紹介（阿部仁）
- 14：30-15：30 「施設運営」に関する討論（司会：佐藤衛，足立伸一）
- 15：30-15：45 — 休憩 —
- 15：45-16：15 挿入光源の検討状況の紹介（土屋公央）
- 16：15-16：45 ビームライン技術の検討状況の紹介（五十嵐教之）
- 16：45-17：45 「エンドステーション」の検討に向けた討論（司会：腰原伸也，近藤寛，雨宮健太）

今回のワークショップは短時間でしたが、事前に討論のテーマと議論のポイントをワークショップのホームページに掲載し、PF-UA の各ユーザーグループの代表にグループ内の質問や意見の集約をお願いしていたため、効率的な議論が行われました。以下、ワークショップの概要を記載します。

まず、平井 PF-UA 会長から KEK 放射光計画推進に関する PF-UA のこの一年間の活動報告と挨拶の後、村上 PF 施設長から、「KEK 放射光計画の進捗状況と今後の予定、実現に向けた実行プラン」、「KEK 放射光の実現とそれに至る間の現行施設の整備・安定運営を最優先として将来計画を進めること」などの説明がありました。続いて、今回のワークショップの主要なテーマの一つである「施設運営」に関する議論に先立って、CDR ver.1 に記載されている施設運営の骨子（三つの利用形態、運営体制、利用・研究環境、教育環境、連携環境など）に関して、阿部仁氏から明快な説明が行われた後、放射光科学第二研究系主幹の足立伸一氏からは、施設の視点からの「施設運営（人材育成）に関する話題提供」として、SLiT-J のコウリション・コン



図2 会場でのやりとり



図3 「施設運営」に関する討論での佐藤衛 KEK 放射光運営形態検討委員会委員長

セプトと大学共同利用の対比，文科省から求められている大学共同利用機関のミッションの見直しと共同利用の効果についての分析，大規模研究施設の整備計画全体などに関する説明に加え，文科省大臣秘書官（元・素核室室長）大土井智氏のコメント「学術のための施設と科学技術のための施設を区別する必要はなく，文部科学省においても一元的な議論の場を整備する必要がある（文部科学教育通信 No.384（2016年3月28日）」の紹介がありました。さらに，KEK 放射光運営形態検討委員会委員長の佐藤衛氏から，21世紀に相応しい大学共同利用の観点からの施設運

営の提言や CDR 改訂版では施設運営と人材育成の章を分けることなどの説明がありました。その後，これらの説明を元に，佐藤，足立両氏を司会者として「施設運営」に関する討論が行われました。討論では，各ユーザーグループからの意見の紹介もありました。

休憩をはさんで，もう一つの主要テーマである「ビームライン（エンドステーション）」の検討に向けた情報共有と議論に移りました。まず，土屋公央氏から KEK 放射光で導入を計画している真空封止アンジュレーター，真空封止型多極ウイグラーなどの挿入光源の検討状況の説明が行われ，続いて，五十嵐教之氏からビームライン技術の概略の紹介の後，高輝度ビーム利用検討の全体戦略の概略（振動対策を考慮したインフラ設備や光学素子設計，ビームラインでの熱負荷の検討，各種のビームラインデザインなど）と今後の要素技術の開発や検証のための R&D について説明がありました。これらの情報を元にして，KEK 放射光ビームライン検討委員会委員長の腰原伸也氏，KEK 放射光ビーム利用検討委員会委員長の近藤寛氏，放射光科学第一研究系主幹の雨宮健太氏を司会者として，事前に集約した各ユーザーグループからの質問や意見を紹介しながら，ユーザーと施設担当者が質疑・応答する形でビームライン（エンドステーション）に関する熱心な討論が行われました。

短時間でしたが，参加者の熱意を実感できるワークショップとなりました。ワークショップの後，直ちに各部屋に分かれてユーザーグループミーティングが遅くまで行われ，翌々日行われた第 34 回 PF シンポジウムの中での KEK 放射光についての更に熱い議論へ展開していきました。

KEK 放射光は，世界をリードする先端研究の開かれた場を実現すると同時に，全国のユーザーの多種多様な研究の用途と需要に応えながら，人材育成にも十分な貢献を行える場を提供することを目的としています。PF-UA としては，KEK 放射光の実現に全面的に協力し，推進することを決議しています。今後とも，KEK 放射光の実現に向けて着実な歩みを進めていくことが極めて重要であり，ユーザーの皆様の一層のご協力をお願い致します。



図4 集合写真

## 2016年度量子ビームサイエンスフェスタ 学生奨励賞について

PF-UA 行事委員 清水敏之 (東京大学)

2017年3月14, 15に開催された量子ビームサイエンスフェスタにて、優秀な学生ポスター発表に対する学生奨励賞の授与が実施されました。2011年7月に開催されました第28回PFシンポジウムにて学生による発表を対象として奨励賞を設けて以来、優れた学生による発表に対して学生奨励賞を授与してきました。

放射光、中性子、ミュオン、低速陽電子なども含めた研究のうち、学生によるポスター発表を審査対象としました。今年度の奨励賞応募ポスター数は66件であり、昨年度(68件)とほぼ同数でした。

今回は昨年度と同様、複数の審査員がポスターセッション前半の間に自由に訪問する形式で発表者のプレゼンテーションと質疑応答による審査を行いました。審査員は必ずしも同じ分野の先生ではありません。しかし専門外の人にも自分の研究をわかりやすくアピールすることは重要です。

審査項目は研究内容の将来性、本人の貢献度、成果の達成度、研究方法の新規性や独創性、内容を明確に伝える分かりやすい発表か、質疑応答の内容など多岐に渡りました。どの発表も力作ぞろいであり、審査結果を集計すると僅差で複数の発表が並びましたが、最終的には上位得点順に学生奨励賞を与えることができました。結果として特定の分野に偏らず広い分野から6件の発表が選ばれました。

授賞式は懇親会中に行われ、幸いなことに全員の授賞者が出席することができました。それぞれに賞状と記念のトロフィーが堀場弘司実行委員長より授与されました。また、合わせて平井光博PF-UA会長、久保謙哉J-PARC MLF利用者懇談会会長よりお祝いの言葉が述べられました。なお受賞者と受賞対象は以下の通りです(順不同)。



図1 奨励賞授賞式(左から)平井光博PF-UA会長(群馬大)、堀場弘司実行委員長、奥平琢也氏(名大理)、中島良介氏(室蘭工大理工)、穴田壮人氏(阪大院基工)、味戸聡志氏(群馬大院理工)、堀尾真史氏(東大院理)、清水聡史氏(静岡県立大薬)、久保謙哉MLF利用者懇談会会長(ICU教授)

審査員の先生方には非常に限られた時間内に多くの発表を審査する無理なお願いを直前にしたにも関わらず、丁寧に審査していただきありがとうございました。また、事務局の方々にも大変お世話になりました。本学生奨励賞はPF-UAおよびJ-PARC MLF利用者懇談会の全面的なご協力のもと運営されていることを申し添えておきます。なお、今年度は例年通りつくば国際会議場で行われましたが、来年度は初の試みとして茨城県立県民文化センターでサイエンスフェスタが行われます。今までのように学生奨励賞への積極的な応募をお願いしたいと思います。

### <学生奨励賞受賞者>

- ◆清水聡史(静岡県立大学薬食生命科学総合学府)  
『心不全に関わる転写因子GATA4 C-terminal Zinc Fingerの結晶構造解析』
- ◆堀尾真史(東京大学大学院理学系研究科)  
『T型銅酸化物母物質超伝導体Pr<sub>2</sub>CuO<sub>4</sub>薄膜の角度分解光電子分光』
- ◆味戸聡志(群馬大学院理工学府物質・生命理工学教育プログラム)  
『糖によるタンパク質安定化作用の構造学的研究』
- ◆穴田壮人(大阪大学大学院基礎工学研究科)  
『CTR散乱強度データからのペロブスカイト酸化物超薄膜構造モデルの構築手法と解の精度の評価』
- ◆中島良介(室蘭工業大学大学院工学研究科)  
『スクッテルサイト系熱電材料Eu<sub>x</sub>Co<sub>4</sub>Sb<sub>12</sub>の高圧合成過程その場観察』
- ◆奥平琢也(名古屋大学理学研究科)  
『複合核状態における時間反転対称性の破れ探索実験』

## 平成28年度第4回PF-UA幹事会, 第2回PF-UA運営委員会 合同委員会 議事録

日時:平成29年3月14日11:50-13:00

場所:つくば国際会議場エポカル小会議室303

出席者:[幹事会]平井光博(会長)、近藤寛(庶務)、田中信忠(会計)、植草秀裕(行事・書記)、清水敏之(行事)、片山真祥(編集・PF指名)、奥部真樹(推薦・選挙管理)、米山明男(共同利用)、奥田浩司(教育)  
[運営委員会]佐藤衛、三木邦夫、百生敦、中山敦子、鈴木昭夫、齋藤智彦、若林裕助、阿部善也、東善郎、増田卓也、木村千里、  
[KEK]足立伸一、雨宮健太、河田洋、千田俊哉、村上洋一、船守展正  
・会長挨拶(平井会長)

### 【報告事項】

- ・施設報告(村上施設長)  
共同利用関係として、予算とPF、AR運転時間、今年度

運転計画、課題数や PF 登録論文数統計、成果アウトプットの質、共同利用強化（優先利用、産業利用）、BL の稼働状況を紹介した。関連した質疑応答を行った。

- サイエンスフェスタ開催情況報告（清水 行事幹事）  
開催中の今年度サイエンスフェスタについて、ポスター・セッション、企業展示の件数について報告した。企業展示数は昨年度より減少した。次年度は 2018 年 3 月 2-4 日に茨城県立県民文化センター（水戸市）で開催される。UG ミーティングは 3 月 2 日を予定している。
- 会計報告（田中会計幹事）  
平成 28 年度会計報告（現時点）、平成 29 年度予算案を報告し、運営委員会で承認された。平成 28 年度はわずかに赤字であった。企業展示、賛助会員が減少している。関連した質疑応答を行った。
- 次年度のサイエンスフェスタについて（平井会長）  
2018 年 3 月 2-4 日に茨城県立県民文化センター（水戸市）で開催することになった経緯について、これまでの合意事項に併せて説明があった。
- PF-UA 活動計画（平井 会長）  
平成 29 年度の活動として、KEK 放射光（CDR, TDR）に対する取り組み、情報発信について説明があった。
- 会長選挙結果報告（奥部 推薦・選挙管理担当幹事）  
制度の説明と経過について説明を行った。運営委員会からの推薦にもとづき、次期会長候補者一名に対し正会員による信任投票を行い、清水 敏之 会員が信任された。

#### 【協議事項】（平井会長）

- PF-UA 会則・細則の改訂について  
会長の選出に関する規定を明確化するための、会則・細則の改訂内容について審議を行い承認した。
- アンケートの実施について  
予算、チームタイム確保に向けたアンケートの実施について議論を行った。これまでのアンケート内容をもとに幹事会で原案を作成して提案する。回数や時期について検討する。
- PF-UA 財政基盤の強化について  
賛助会員、企業展示、広告数の変化が説明され、これらを増やす方法について議論を行った。

#### その他の協議事項

- 平成 30 年度以降のサイエンスフェスタの組織の拡大（量子科学技術研究開発機構（QST）と日本原子力研究開発機構物質科学研究センター（MSRC）の参加）に

関する話し合いが行われる事について情報提供があり、意見交換を行った。

- PF-UA 総会の議事次第を承認した。

## PF-UA 総会報告

PF-UA 会長 平井光博

日時：2017 年 3 月 15 日（水）13：30～14:30

場所：つくば国際会議場 中ホール 300

下記の議事次第に従って PF-UA 総会がとり行われ、無事終了いたしました。PF-UA ならびに関係者の皆様方のご協力に心より感謝いたします。

#### PF-UA 総会議事次第

##### 報告事項

- 平成 28 年度会計報告（田中信忠 会計担当幹事）
- 平成 29 年度量子ビームサイエンスフェスタに関して（清水敏之 行事担当幹事）
- PF-UA 活動報告（KEK 放射光計画に関して）（平井光博 会長）
- 平成 29 年度活動予定（平井光博 会長）
- 次期 PF-UA 会長の選出結果の報告（奥部真樹 推薦・選挙管理担当幹事）
- 清水敏之 次期 PF-UA 会長 挨拶

##### 協議事項

- 会長選出に関する PF-UA 規定の追加、修正に関して
- チームタイム確保に向けたアンケート、要望書に関して

その他（司会：平井光博）

「KEK 放射光」推進に向けての総合討論

以下、報告事項、協議事項の要点をまとめます。

報告事項（1）において、賛助会員とサイエンスフェスタ展示・広告企業の減少のため、単年度赤字になっており、積極的な企業への働きかけが重要であるとの報告がありました。報告事項（2）では、2017 年度の量子ビームサイエンスフェスタの日程（2018 年 3 月 2 日（金）～4 日（日））と開催場所（茨城県立県民文化センター（水戸市））の報告がありました。報告事項（3）では、2016 年 3 月から 2017 年 3 月の期間、PF-UA が行った KEK 放射光に関する下記の活動報告がなされました。

- （2016/03/14）拡大ユーザーグループ・ミーティングにおける KEK 放射光計画の議論を開始。
- （2016/03/16）第 33 回 PF シンポジウムにおける KEK 放射光計画の公表に基づき、PF-UA 総会での「all-Japan での協力体制構築」と全面的な協力を決議。
- （2016/04/25）PF-UA 戦略・将来計画検討小委員会の

開催。3つの「KEK放射光計画推進に関するPF-UA検討委員会」（運営形態検討委員会、ビームライン検討委員会、ビーム利用検討委員会）と、各委員会の構成、ミッションなどを協議。

- (2016/06/08) PF-UA幹事会・運営委員会での審議。KEK放射光検討委員会の方針、構成、人選方法などの協議と承認。
- (2016/07/17) PF-UA幹事会・PF-UA戦略・将来計画検討小委員会の開催、およびKEK放射光検討委員会準備会の開催。KEK放射光検討委員会の構成、ミッションの協議と承認。KEK-PIPの決定、ロードマップ改訂版の公開後に他施設等の委員の推薦と依頼を開始し、KEK放射光ワークショップを開催することを承認。
- (2016/07/20) 他施設等の委員就任依頼、ビーム利用検討委員会におけるCDR原稿の依頼、原稿の収集と校閲・修正の開始。
- (2016/09/09) KEK放射光CDR（暫定版 ver2.1）の施設からの公開
- (2016/09/11) PF-UA幹事会・運営委員会の開催、第1回KEK放射光ビームライン検討委員会・運営形態検討委員会の開催
- (2016/09/11-12) 第1回KEK放射光ワークショップを開催。KEK放射光CDR（暫定版）を分野ごとに詳細検討、改定、修正案のとりまとめ、総合討論。
- (2016/10/31) KEK放射光CDR ver.1の施設からの公開
- (2016/12/21) 第2回KEK放射光ビーム利用検討委員会を開催。3月改訂に向けて、CDRサイエンスのアピールポイント、サイエンスケース・産業利用の委員会からの追加提案、一般からの募集、マルチプローブ提案等に関する協議。
- (2017/03/13) 第2回放射光ワークショップを開催。CDR ver.1に盛り込まれた運営形態に関する説明と議論、TDR作成に向けたビーム利用検討委員会で検討されたサイエンスを実現するための光源やビームラインの性能・検討事項の確認、エンドステーションの検討の「進め方」に関するユーザからの要望等に関する質疑、応答。今後の作業スケジュール等に関する議論。

報告事項（4）では、29年度のPF-UAの活動予定「KEK放射光計画に対するPF-UAの今後の取り組み」として、下記の方針が確認されました。

- PF-UAのKEK放射光検討委員会と施設側のKEK放射光検討ワーキンググループとの密接な連携のもとで、KEK放射光計画の実現に向けて、CDRの改訂、TDRの作成の作業に協力する。
- 同時に、計画の進捗状況に関して、KEK放射光ホームページやPF-UAホームページなどを利用してPFユーザのみならず全国の放射光利用者、関係各所へ速やかに情報発信を行い、各ユーザ、ユーザグループを通じて、様々な分野・領域での研究会、学会等での広報を行い、

all-Japanでの合意形成を醸成する。

報告事項（5）では、現会長任期1年前に行われる次期PF-UA会長選挙結果として、東京大学薬学研究所の清水敏之氏が選出されたことが報告され、清水氏からご挨拶を頂きました。

引き続き、協議事項（1）において、PF-UA会長選出プロセスの明確化のための規定改定案が提案され、承認されました。協議事項（2）では、新たな「ビームタイム確保に向けたアンケート、要望書」に関して提案がありました。このアンケートの目的は、現在、継続的なKEK全体の予算削減により、施設側の経費削減の努力にもかかわらず、PFの3000時間程度の運転経費の確保さえ厳しい状況になっていることを鑑み、4000時間程度の運転時間の確保がユーザの教育・研究の推進にとって死活的な問題であることをPF-UAとして改めて訴えると同時に、国プロ等の重要プロジェクト研究や科学研究費等の外部資金研究とPF利用との関係をデータで示し、より、効果的な各所への要望書の資料とする趣旨であることが説明され、アンケート項目の設定等に関しては、幹事会・運営委員会に一任することが承認されました。

その他の項目として、前々日の「第2回KEK放射光ワークショップ」及び当日午前のPFシンポジウムのセッションでのKEK放射光に関する議論を踏まえ、PF-UAとしてのKEK放射光推進に向けての総合討論が行われました。大学共同利用機関あり方そのものが問われているとの説明が野村理事からあり、また、SLIT-Jの進捗状況などによって「状況が大きく変わる可能性がある」との指摘が山田物構研所長からありました。様々な複合的な要素があるものの、PF-UAとしては、施設との密接な連携のもとKEK放射光計画を一致団結して推進していくことを再確認しました。

以上。

## ユーザーグループ一覧

平成 29 年 4 月 1 日現在

1	XAFS	田渕 雅夫	名古屋大学
2	タンパク質結晶 構造解析	清水 敏之	東京大学
3	小角散乱	櫻井 伸一	京都工繊大学
4	放射線生物	横谷 明德	(国) 量子科学 技術研究開発機構
5	粉末回折	植草 秀裕	東京工業大学
6	高圧	高橋 博樹	日本大学
7	構造物性	有馬 孝尚	東京大学
8	表面科学	吉信 淳	東京大学
9	固体分光	齋藤 智彦	東京理科大学
10	原子分子科学	小田切 丈	上智大学
11	核共鳴散乱	小林 寿夫	兵庫県立大学
12	位相計測	百生 敦	東北大学
13	低速陽電子	長嶋 泰之	東京理科大学
14	医学利用	松下昌之助	筑波技術大学
15	X線発光	手塚 泰久	弘前大学
16	表面界面構造	近藤 敏啓	お茶の水女子 大学
17	マイクロビーム X線分析応用	高橋 嘉夫	東京大学
18	物質物理	奥部 真樹	東北大学
19	X線トポグラフィー	山口 博隆	産業技術総合 研究所
20	動的構造	腰原 伸也	東京工業大学
21	鉱物・合成複雑 単結晶	吉朝 朗	熊本大学
22	産業利用	米山 明男	(株) 日立製作所 中央研究所

## PF-UA 運営委員名簿

任期：平成 27 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日

朝倉清高	北海道大学触媒科学研究所
東 善郎	上智大学理工学部
阿部善也	東京理科大学理学部
今井基晴	(独) 物質・材料研究機構
植草秀裕	東京工業大学理学院
奥部真樹	東北大学 金属材料研究所
木村千里	帝京大学医療技術学部
栗栖源嗣	大阪大学 蛋白質研究所
齋藤智彦	東京理科大学理学部
櫻井伸一	京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科
佐々木聡	東京工業大学
佐藤 衛	横浜市立大学大学院生命医科学研究科
志村考功	大阪大学大学院工学研究科
鈴木昭夫	東北大学 大学院理学研究科
田中信忠	昭和大学薬学部
田渕雅夫	名古屋大学 シンクロトロン光研究センター
中山敦子	岩手大学理工学部
沼子千弥	千葉大学理学部
増田卓也	(独) 物質・材料研究機構
三木邦夫	京都大学大学院理学研究科
百生 敦	東北大学 多元物質科学研究所
八島正知	東京工業大学大理学院
横谷明德	(国) 量子科学技術研究開発機構
米山明男	(株) 日立製作所 中央研究所
若林裕助	大阪大学大学院基礎工学研究科
足立伸一	物質構造科学研究所・放射光科学研究施設
雨宮健太	物質構造科学研究所・放射光科学研究施設
河田 洋	物質構造科学研究所・放射光科学研究施設
千田俊哉	物質構造科学研究所・放射光科学研究施設
村上洋一	物質構造科学研究所・放射光科学研究施設

## PF-UA 報告（今年度の活動）

庶務幹事 近藤 寛（慶応義塾大学）

平成 29 年度第 1 期のチームタイムが終わり、10 月下旬までのシャットダウン期間に入っております。この期間を利用して、第 2 期のチームタイムに向けたご準備を進められているユーザーの方も多いのではないかと思います。PF-UA も、平井会長のもと、ユーザーの皆様のご協力をいただきながら今年度の活動を活発に進めて参りたいと思います。すでに今年度になってからユーザアンケートをさせていただき、皆様の PF の利用状況やご要望に関する情報を集約させていただいているところです。また、多くのユーザグループの更新手続きも進めていただいています。皆様には日頃より多大な御協力を頂きまして、誠にありがとうございます。皆様の御協力を活かせるような PF-UA の活動を進めて参りたいと存じますので、引き続き、御支援と御協力を心よりお願い申し上げます。

今年度の PF-UA の活動に関しましては、6 月 5 日（月）に平成 29 年度第一回幹事会・運営委員会が開催され、下記のような活動予定を確認しました。（その他の議事に関しましては議事録をご参照ください。）

### 平成 29 年度の PF-UA の活動予定

#### 【KEK 放射光計画に関して】

- PF-UA の KEK 放射光検討委員会と施設側の KEK 放射光検討ワーキンググループとの連携のもと、KEK 放射光計画の実現に向けて、CDR の改訂、TDR の作成を目指して PF-UA ・ KEK 放射光検討委員会の活動を行う。
- 計画の進捗状況に関して、KEK 放射光ホームページや PF-UA ホームページなどを活用して PF ユーザのみならず全国の放射光利用者、関係各所へ速やかに情報発信を行い、各ユーザ、ユーザグループを通じて、様々な分野・領域での研究会、学会等での広報を行い、all-Japan での合意形成を醸成する。広報活動を強化する。

#### 【ユーザグループの活動の強化に関して】

- PF-UA ホームページや登録ユーザ名簿などを活用して、ユーザグループ代表を中心とした加入の呼びかけ、ワークショップの開催などを積極的に行う。PF-UA からの補助を強化する。

#### 【PF-UA の財政基盤強化と賛助会員に関して】

- 財政基盤の安定化は、PF-UA の活動の継続性、独立性を維持する上で重要であるため、賛助会員の維持、新規の賛助会員の勧誘を行う。
- 賛助会員の待遇、きめ細かい情報提供サービスなどの改善を行う。
- 幹事、運営委員、ユーザグループ代表を中心として積極的な働きかけを行う。

## 平成 29 年度 第 1 回 PF-UA 幹事会議事録

日時：平成 29 年 6 月 5 日（月）13:00 – 15:00

場所：つくば国際会議場エポカル小会議室 303

出席者：[幹事会] 平井光博（会長）、近藤寛（庶務）、田中信忠（会計）、植草秀裕（行事・書記）、清水敏之（行事）、朝倉清高（戦略・将来計画）奥部真樹（推薦・選挙管理）、米山明男（共同利用）、奥田浩司（教育）

[KEK] 雨宮健太、村上洋一、船守展正

- 会長挨拶（平井会長）

#### 【報告事項】

- 平成 28 年度会計報告（田中会計幹事）
- JSR2018 報告（清水行事幹事）
- KEK のユーザー登録のホームページに関して（平井会長）
- ユーザアンケートの実施状況（平井会長）
- 施設報告（村上施設長）
- KEK 放射光の進捗状況等の報告（村上施設長）

#### 【協議事項】

- H29 年度予算案
- 財政基盤強化と賛助会員の勧誘について
- 運転時間確保に関する方策に関して
- 大学共同利用機関法人の見直しに関する対応に関して

## 平成 29 年度 第 1 回 PF-UA 運営委員会 議事録

日時：平成 29 年 6 月 5 日（月）15:00 – 17:00

場所：つくば国際会議場エポカル小会議室 303

出席者：[幹事会] 平井光博（会長）、近藤寛（庶務）、田中信忠（会計）、植草秀裕（行事・書記）、清水敏之（行事）、朝倉清高（戦略・将来計画）奥部真樹（推薦・選挙管理）、米山明男（共同利用）、奥田浩司（教育）

[運営委員会] 佐々木聡、佐藤衛、中山敦子、若林裕助、今井基晴、増田卓也、木村千里、雨宮健太、村上洋一、船守展正

- 会長挨拶（平井会長）

#### 【報告事項】

- 会計報告（田中会計幹事）  
平成 28 年度会計報告（最終）を行った。平成 28 年度は黒字となった。企業展示等の減少により収入が減少したが、展示会経費も減少したためである。関連した質疑応答を行った。

- JSR2018 報告（清水行事幹事）  
第 31 回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウム（JSR2018）に共催として参加している。準備状況等を紹介した。JSR2018 は 2018 年 1 月 8-10 日につくばエポカルで開催される。JSR2019 は 2019 年 1 月 9-11 日に福岡国際会議場を予定している。
- KEK のユーザー登録のホームページに関して（平井会長）  
現状の問題点を確認し、議論を行った。PF-UA ホームページや会員登録システム等の整備や運用は KEK のユーザー登録システムと連携が重要であり、引き続き施設側に提案・要望を行う。会則 5 条第 1 項正会員の資格の年限を年度ごとではなく、ユーザー登録がなくなつてから何年という年限に改訂するという方向で検討する。
- ユーザーアンケートの実施状況（平井会長）  
アンケート回答について、概要が紹介された。また実施について、回答率や方式、内容に関する議論を行った。回答率を上げるために、期間を延長して実施することとした。
- 施設報告（村上施設長）  
共同利用実験関連（予算推移、運転時間、運転状況、G 型課題数推移）、共同利用成果（論文登録数推移、被引用数）、共同利用強化、BL 整備関連報告を行った。
- KEK 放射光の進捗状況等の報告（村上施設長）  
進捗状況として、CDR v1.1 発行、MAC（KEK-LS Machine Advisory Committee）実施、量子ビーム利用推進小委員会（第 8 回）、ならびに関連報告を行った。今後も検討を継続するが CDR の改訂、TDR 作成は外部の状況を注視しながら慎重に進める。
- H29 年度の PF-UA の活動予定（平井会長）  
KEK 新放射光関係、全国の利用者や関係各所へ情報発信（広報活動強化）、ユーザーグループ加入呼びかけなど活動の強化を行う。

#### 【協議事項】

- H29 年度予算案を承認した。
- 財政基盤強化と賛助会員の勧誘について議論し、賛助会員を担当する小委員会が注力することとした。
- 運転時間確保に関する方策に関して、議論を行った。アンケートの延長実施を行う。働きかけの方策、ユーザーがどのように協力できるか（旅費支給基準、外部資金の利用）を議論した。
- 大学共同利用機関法人の見直し（文部科学省科学技術・学術審議会「今後の共同利用・共同研究体制の在り方について」（第 86 回研究環境基盤部会、H29.1.31））への対応について議論を行った。KEK でも検討を行っているが、PF-UA からの協力可能性を検討する。



### KEK 機構長への要望書提出の報告

PF-UA 会長 平井光博  
PF-UA 庶務幹事 近藤 寛

去る9月11日に、朝倉清高戦略・将来計画担当幹事、清水敏之次期会長と平井の3名でお伺いし、KEK 機構長と会談致しました。その際、要望書を提出いたしました。

内容の骨子は、今回のPF-UA アンケート2017の分析結果をもとに、1) 1000時間程度のビームタイム増加のための予算の確保、2) KEK 放射光計画の継続的な推進です。ご存じのように、文部科学省が2018年度予算の概算要求で、次世代型放射光施設の早期整備を目指し、計画主体であるQSTに対して設計調査費など4億4900万円が盛り込まれました。PF-UAとしては、あくまで、多様な学術・応用研究と学生を含む人材育成が可能な「開かれた放射光施設」であるKEK放射光計画をKEKが主体となって推進すべきであるとお話ししており、機構長も次期放射光計画と大学共同利用は放棄することはないと明確に返答されています。

まだ厳しい状況が続いていますが、皆様方の団結といっそうの協力をよろしく願いいたします。以下、要望書の全文を記載します

#### 大学共同利用機関法人高エネルギー加速器研究機構 機構長 山内 正則 殿

日頃から、PFの将来計画、運営、ユーザー利用に関してご尽力を賜り、ユーザー一同、心から御礼申し上げます。運転予算確保、およびKEKの次期放射光源計画の推進などに関して行ったアンケートに基づいてPF-UAとしての意見をとりまとめました。

今後とも、PF-UAは全国を俯瞰する立場での放射光ユーザーの要望をお伝えすると同時に、機構、研究所、施設との密接な協議・協力のもとでPFの運営や次期計画の実現に向けて邁進してまいりますので、一層のご尽力を賜りたく心底よりお願い申し上げます。

以下、長文になりますことをご容赦ください。

#### PF-UA 要望書

『運転予算確保、およびKEKの次期放射光源計画の推進』に関して』

#### 【PF利用の現状とPF-UAの活動の経緯の概略】

1983年のPF共同利用開始以降、学術分野から産業分野にわたる広範な研究に開かれた放射光利用施設として、多くの国内外の研究者・学生が利用し、総出版論文数は約16,000報、2,500名を超える修士・博士が輩出されました。放射光施設は、今や、物質・材料・生命などの基礎から先

端・応用研究の推進、それらを基礎とする産業イノベーションはもとより、環境・災害・高齢化などの様々な課題解決のためにはなくてはならない研究基盤インフラとなっています。しかし、現状では、施設の度重なる装置更新の努力にもかかわらず既に限界に達しており、老朽化や性能面での競争力の低下は顕著であり、加えて、震災後の運転経費の高騰等によるビームタイムの激減により、共同利用自体が危機的状況に瀕しております。

共同利用配分時間：PFでは一昨年~3000時間、昨年は~2900時間、PF-ARでは一昨年~2800時間、昨年は~1100時間でしたが、PFは、現在でも毎年3,000名を超える全国のユーザーが利用する放射光の学術研究と教育の拠点施設となっており、その需要は極めて高い状況を維持しています。

このような危機的な状況の打開のためには早期の次期計画の推進が是非必要であるとのユーザーの強い要望に基づいて、PF-UA戦略・将来計画検討小委員会では国内外の放射光科学の進展を俯瞰した現状分析を行い「PF-UA白書：PFおよび日本の放射光科学の将来への提言」（2015年2月）を公表し、これを契機として物質構造科学研究所運営会議のもとに設置されたPF将来計画検討委員会において10回にわたる検討・協議の上、運営会議に「PF将来計画検討委員会最終報告書」として提出され、審議、承認されました（2016年3月）。PF-UAでは、昨年の3月の総会において最終報告書を支持し、次期計画「KEK放射光」の推進に全面的に協力することを決議しました。KEKロードマップ改定（2016年6月）の後、22のユーザーグループ代表、PF-UA幹事・運営委員、所内担当者、他施設代表者、有識者、産業界関係者などから構成される全国レベルのPF-UA KEK放射光検討委員会（KEK放射光運営形態検討委員会、KEK放射光ビーム利用検討委員会、KEK放射光ビームライン検討委員会の構成）を直ちに立ち上げ、所内のKEK放射光実行本部との相互補完的な連携により、KEK放射光ワークショップ（第1回2016.9、参加者210名、第2回2017.3、参加者180名）の開催やPF-UA各KEK放射光検討委員会の開催、PFシンポジウム等で活発な議論を行い、CDRver.1（2016/10/31）、CDRver.1.1（2017/5/22）の作成に協力し、現在に至っております。

また、学術研究の実態指標である学術論文数は、我が国のみが2000年以降、全分野、特に理工系分野で激減していることが「国立大学協会政策研究所所長自主研究（H27年5月）www.janu.jp/report/files/2014-seisakukenkyujo-uneihi-all.pdf」や日本物理学会誌（2017、VOL.72）「各国の論文数の推移から見えるもの」で明確に指摘されており、そのため、「学術研究の大型プロジェクトの推進に関する基本構想ロードマップ2017」においても、基本的性格として「大学等における研究・教育を広い立場で支え学術基盤を強化すること」、「多数の研究者が明確な推進体制のも

とに参加する全国規模のプロジェクトであること」が謳われ、また、実施主体として「今後も我が国の学術研究全体の基盤の強化に資する」ために大学共同利用機関や共同利用・共同研究拠点が挙げられています。一方で、文部科学省の科学技術・学術審議会にて「今後の共同利用・共同研究体制のあり方」（第86回研究環境基盤部会、H29.1.31）が議論されており、KEKを含む4つの大学共同利用機関について改革意見の取りまとめが求められており、その中の項目「大学の研究力・教育力強化への貢献」において、「大学の研究力向上への貢献の周知と定量化、より主体的な大学院教育への組織的な関与が重要である」ことなどが指摘されています。

### 【PF-UA アンケート 2017 に基づくユーザーの現状、要望の分析結果の概要】

(PF-NEWS 本号に記載しておりますのでご覧ください)

#### 【今後の PF の運営、将来計画に対する PF-UA からの要望】

「我が国の科学技術の基盤インフラである大学の研究・教育力の強化」にとって、過去34年間、PFはユーザーの研究・教育、人材育成を通じて多大の貢献をしてきたことは明らかですが、国立大学法人化以降の大学の運営費負担の増加とは逆の1000億円以上の総額の減少は、教育研究費の激減にそのまま反映されており、今や国公立・私立を問わず、大学の財政状況は危機的です。現在、放射光の利用者は、SPring-8やKEK-PFを中心として現在1万人を超えており（内訳：SPring-8とKEK-PFの平均は、学術関係80%、産業関係12%、海外・その他）、そのため、大学共同利用機関法人としてKEKの次期放射光計画においても、物質・材料・生命科学の基礎研究から応用研究まで広範囲の研究者が利用可能な運営形態や、学生を含む多数の人材育成を十分に配慮した計画であることが、死活的な重要性を有しています。

上記の事柄を踏まえ、次のことを強く要望いたします。

- 1) 2011年以降のビームタイム配分の大幅な削減状況の継続は、ユーザーのPFを利用した研究教育活動の維持に重大な影響を及ぼしており、その結果、ビームタイム配分無しの採択課題の増加、学術論文数の減少、研究の主要手法からの見直し、学生の研究テーマの変更などが顕著になっています。PFが今後とも、活発な学術研究・教育活動の真に優れた施設として維持・発展するためには、国際的な標準運転時間5000時間程度を目途とした十分なビームタイムの確保が必須であり、当面、2011年以前の実績である4000時間程度の配分が可能な運転予算の確保にご配慮頂きますよう様、お願いいたします。
- 2) KEKの次期放射光計画は、世界をリードする先端研究の開かれた場を実現すると同時に、全国のユーザーの多種多様な基礎から応用に至る幅広い研究の用途と

多くの需要に応えながら、中・長期的な視点から、我が国の唯一の資源である大学院生を含めた「高度な科学技術力を有する人材」の継続的な育成、涵養が行える場を提供することを目的としています。上記の観点から、PF-UAの総意として、次期放射光計画を機構、研究所、施設、ユーザー一体となって、今後も継続的に推進頂きますよう改めてお願い致します。

- 平井光博（群馬大学）PF-UA 会長  
清水敏之（東京大学）PF-UA 次期会長  
近藤 寛（慶応大学）PF-UA 庶務幹事、兼 KEK 放射光ビーム利用検討委員会委員長  
腰原伸也（東京工業大学）PF-UA 戦略・将来計画担当幹事、兼 KEK 放射光ビームライン検討委員会委員長  
朝倉清高（北海道大学）PF-UA 戦略・将来計画担当幹事  
佐藤 衛（横浜市立大学）PF-UA 戦略・将来計画検討委員会委員、兼 KEK 放射光運営形態検討委員会委員長

## PF-UA アンケート 2017 報告

PF-UA 会長 平井光博  
PF-UA 庶務幹事 近藤 寛

日頃から、教育研究活動にPFをご利用頂き、また、PFの運営、将来計画にご協力いただきまして誠に有難うございます。先に行いましたPF-UAアンケート2017の集計結果をご報告いたします。アンケートにご協力いただき有難うございました。

アンケート題目：「PF-UA アンケート 2017：ビームタイム確保および利用形態に関して」

アンケート実施期間：4月26日～6月30日

回答数：716件

### 【PF-UA アンケート 2017 に基づくユーザーの現状、要望の分析結果の概要】

PFユーザーの実態を把握するために、新たなアンケート「PF-UA アンケート 2017：ビームタイム確保および利用形態に関して」を実施しました。PF利用とそのビームタイム確保、および将来計画が、研究・教育の推進はもとより国家プロジェクト等への参画、科学研究費獲得、産学連携利用において如何に重要であるかを調査するために、次のような項目を設定しました。①ビームタイムの現状の研究・教育に対する影響、②それらの推進に必要なビームタイム、③PF利用の目的、実施形態、④研究予算・外部資金獲得状況、⑤PF利用における旅費補助、⑥現在の研究・教育の推進におけるPF利用の重要性・必要性、⑦将来の研究・教育の推進におけるKEK放射光計画の重要性。

さらに、現在、大学共同利用機関法人の役割（大学の研究・教育の強化への具体的貢献）の見直し・改革が求められており、それに関連して、⑧連携大学院協定などの協力・貢献の可能性についても調査しました。

結果の概要は下記の通り。

**項目①に関して：** 研究への影響が8割程度と顕著であり、教育への影響も7割程度となっている。教育現場では多くの場合、様々な手法を利用していると考えられるが、影響が避けられない事態になっていると考えられる。

**項目②に関して：** PFの2011年度以前の配分実績（～4000時間）、および現在の国外の大型施設の状況（～5000時間）に匹敵する、4000時間（167日）以上の利用時間配分の希望が8割を超えている。大学共同利用機関として、大学の開講時間（32週、～5400時間）を考慮すれば妥当な希望時間と考えられる。

**項目③に関して：** PFの利用目的として、研究と学生の教育指導が9割を占め、産学連携・産業利用が9%程度となっている。研究・教育の需要が極めて高い。利用形態としては、学生をメンバーに含む単一・複数グループの利用が84%程度となっており、学生の教育指導に重要な役割を担っていることが理解できる。

**項目④に関して：** PF利用研究の予算状況に関しては、所属機関の運営費・研究費のみの利用者は28%、所属機関の経費と外部資金の併用が36%、外部資金・その他が36%である。PF利用研究に7割程度が何らかの外部資金を投入する必要がある厳しい状況が伺える。外部資金としては、科研費が63%を占め、国家プロやNEDO、CREST等の大型予算19%となっており、科研費や大型予算の研究推進にPFが活用されていることが判る。

**項目⑤に関して：** 現在、3000時間（125日）程度の運転経費の確保も厳しい状況が続いているが、配分時間の確保はユーザーにとって研究・教育の継続的な推進にとって大変重要であるため、利用者自体の厳しい予算状況下にあっても旅費補助予算の運転経費への投入に関しては72.6%のユーザーが賛成している。しかし、一方、27.4%の反対意見があり、これは上記項目④の「所属機関の運営費・研究費のみの利用者：28%」や、下記項目の遠隔地利用者の地域分布を考慮すると、旅費補助の削減が利用者の「予算状況による選別」、「居住地域による限定」など、利用者の減少に繋がることは確実であり、延いては大学共同利用機関としての役割・意義の縮小に繋がると危惧される。

**項目⑥に関して：** PF利用の研究・教育の推進における重要性に関しては、「主要な手法、常套手法」として必要との回答が93.5%であり、大多数を占めている。ある程度必要は5.9%、他の施設利用があり重要でないとの回答は0.6%に過ぎない。

**項目⑦に関して：** 現在計画中の「KEK放射光」の実現の重要性に関しては、「極めて重要である」、「重要である」、「ある程度重要である」との回答が、それぞれ62%、26%、8.1%となっており、99%以上のユーザーが実現を期待している。この期待に応えるように計画の継続と実現

へ向けての道筋を明確にすることが極めて重要である。

**項目⑧に関して：** 大学共同利用機関法人の改革意見で取り上げられた「大学の研究力、教育力強化への貢献」の中で、組織として目に見える形の大学との連携、より主体的な大学院教育への貢献が求められており、これに協力するために、「機構と大学関係者との組織的対話の着手への協力」を質問した。「連携大学院制度の活用、大学院教育（講義等）」など、何らかの協力が可能であるとの回答は85%程度であり、今後、PFユーザーと機構との連携を活用して、改革意見に十分応え得る体制造りが可能であることを示している。

#### 【PF-UA アンケート 2017 データ】

アンケート内容および結果は下記の通りです。

アンケートの目的（序文）：

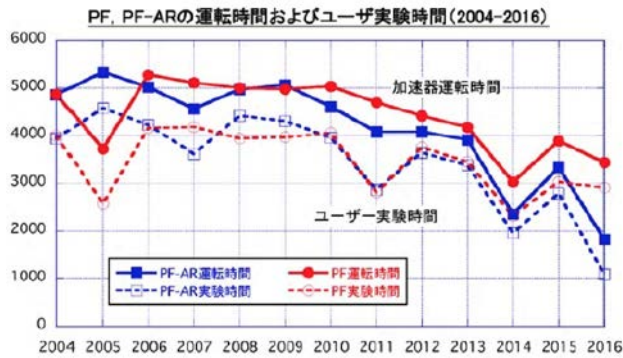
2011年の東北大震災以前の年間ユーザ配分ピークタイムは、PFでは～4000-4400時間、PF-ARでは～4000時間程度でした。PFでは一昨年～3000時間、昨年は～2900時間、PF-ARでは一昨年～2800時間、昨年は～1100時間でした。震災後の電気代高騰と予算削減が継続している中で、施設の経費節減や外部資金獲得の尽力にもかかわらず、震災前の4000時間程度の配分はもとより、昨年度並みの運転経費の確保も厳しい状況となっております。ユーザの皆様方のPFを利用した研究・教育のアクティビティを維持するためには、機構・研究所・施設のみならず外部の関係各機関に対しても可能な限り具体的なデータに基づいた「ピークタイム確保に関する要望書」などを提出することが必要であり、新たなアンケートの実施が3月のPF-UA幹事会・運営委員会および総会にて合意されました。

特に、今回のアンケートではピークタイムの利用状況の他に、ユーザの皆様方のPFの利用形態や研究予算・外部資金獲得状況に関するもお伺いいたします。PF利用が人材育成はもとより国家プロジェクト等への参画、科学研究費獲得、産学連携利用の推進において如何に重要であるかを示す基礎資料とさせていただきます。また、現在、大学共同利用機関法人の役割（大学の研究・教育の強化への具体的貢献）の見直し・改革が求められており、それに関連してPF利用の今までの研究・教育への貢献や将来計画に関する設問もございます。皆さまご多忙の時期とは思いますが、何卒ご理解とご協力のほどお願い申し上げます。

※ 誌面ではグレースケールとなっておりますが、ウェブ版にてカラー原稿がご覧いただけます (<http://pfwww.kek.jp/publications/pfnews/>)。

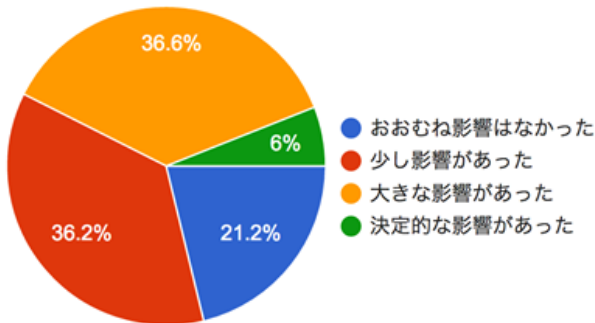
### 問1) 昨年度のユーザ配分ビームタイムの影響 (研究)

PFではおよそ2900時間(121日)、PF-ARではおよそ1100時間(46日)でした。研究面での影響をお伺いします。ご参考までに2004年以降のPFの実験時間の推移と世界の幾つかの施設のユーザー実験時間をお示します。



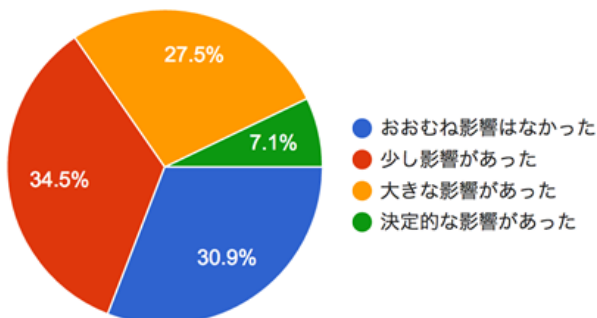
ヨーロッパ・アメリカ・アジアの幾つかの放射光施設のユーザー実験時間

Facility in EU & US	User-beam-time	Facility in Asia	User-beam-time
ESRF (FR)	5400 (2015)	SPring-8 (JP)	4125 (2016)
Diamond (UK)	4920 (2016)	SSRF (CH)	4896 (2015)
APS (US)	5000 (2016)	TLS (Taiwan)	5327 (2015)



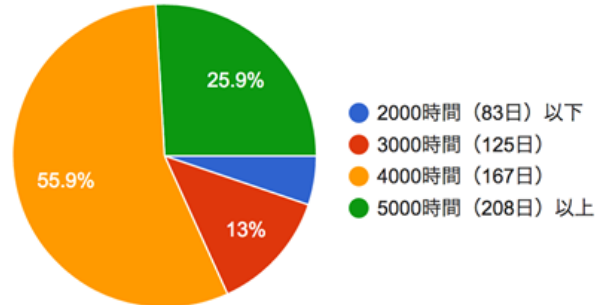
### 問2) 昨年度のユーザ配分ビームタイムの影響 (教育)

教育面での影響をお伺いします (大学教員にお尋ねします)。



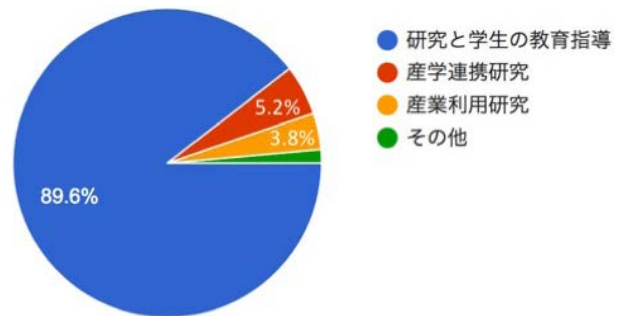
### 問3) 必要なユーザ配分ビームタイム

共同利用機関の本来の趣旨からして、十分な運転時間の確保は不可欠ですが、今後、PFを利用した研究・教育を継続的に推進する上で必要なビームタイムの目安についてお伺いします。



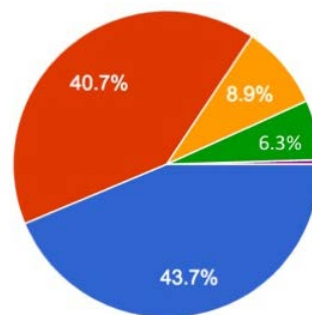
### 問4) PFの利用目的

PFを利用する主な目的についてお伺いします。



### 問5) PFの利用形態

PFを利用した研究・教育の実施形態についてお伺いします。



### 問6) PF 利用研究の予算状況 (1)

PF を利用した研究推進の予算状況についてお伺いします (複数選択可能)。



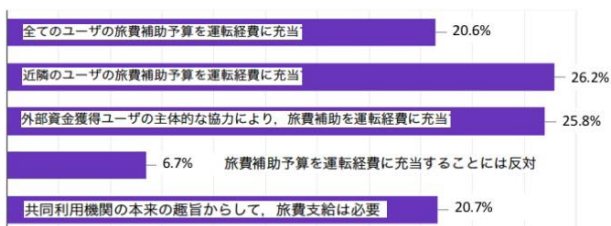
### 問7) PF 利用研究の予算状況 (2)

上記の設定で、外部資金、所属機関経費と外部資金の併用を選択された方にお伺いします (複数選択可能)。

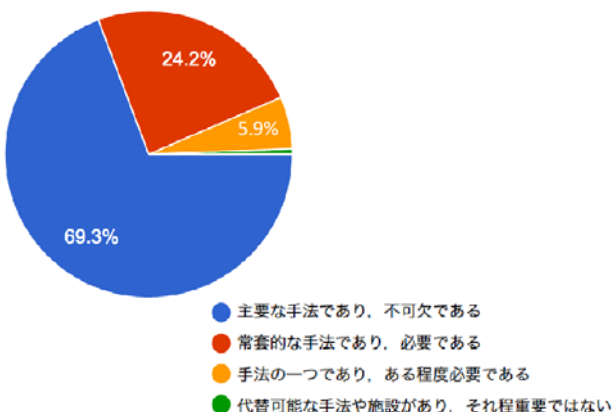


### 問8) PF 利用における旅費補助

現在、PF では利用者の方々に旅費補助を行っています。予算的に厳しい状況が続いています。旅費補助予算を運転経費に充当することについてお伺いします (複数選択可能)。

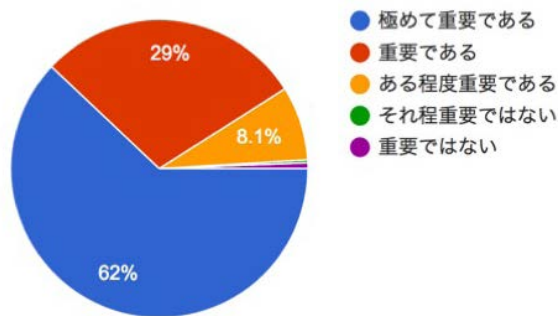


### 問9) PF 利用の重要性・必要性 (現在)



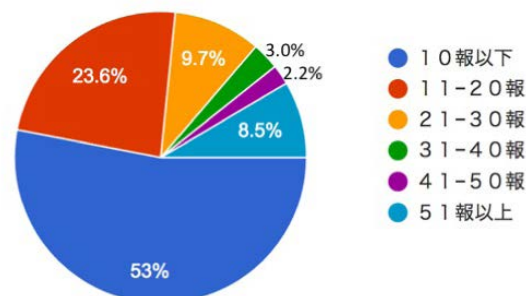
### 問10) 「KEK 放射光」計画に関して (将来)

現在 PF-UA と施設が協力して進めています「KEK 放射光」計画は、世界最高の光源性能はもとより、規模や運用形態においても多くのユーザが研究・教育に長期間利用可能な放射光施設を目指しております。また、この計画は機構の大学共同利用機関法人としての今後のあり方や役割の議論とも深く関係しています。ユーザの皆様の今後の研究・教育の継続的な推進、展開にあたって、「KEK 放射光」実現の重要性をお伺いします。

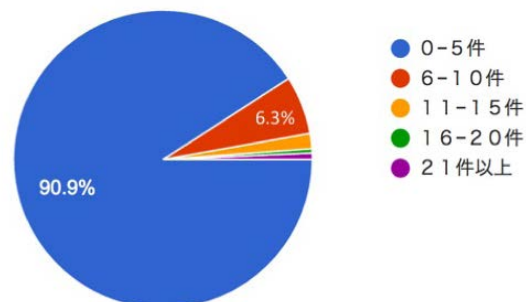


### 問11) PF 利用の研究・教育における貢献 (大学教員にお尋ねします)

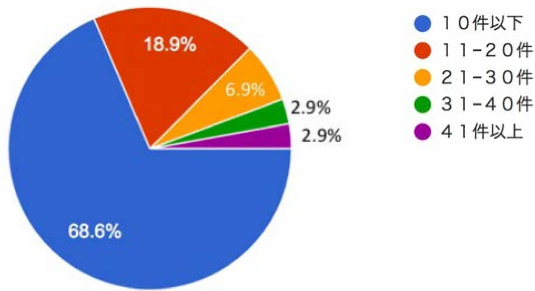
問11-1) 今までに PF を利用して発表した学術論文数 (共著を含む)



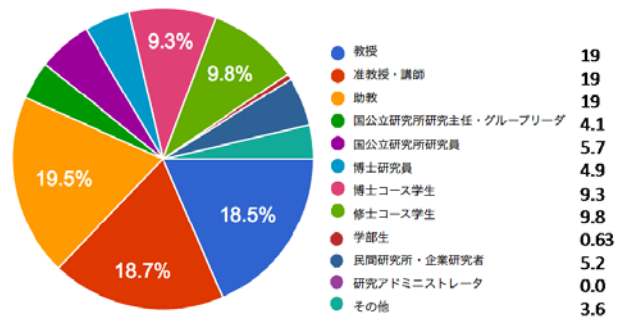
問11-2) 今までに PF を利用して指導した博士論文数



問 11-3) 今までに PF を利用して指導した修士論文数

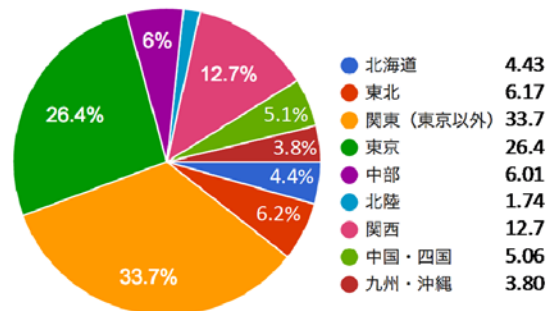
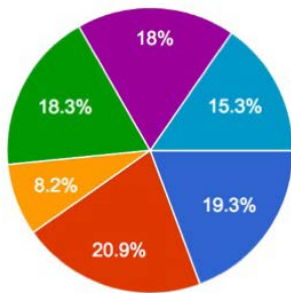


基本情報 (2) : 回答者の身分



問 11-4) 機構と大学関係者との組織的対話の着手への協力  
 現在、機構では総研大とは別に 6 大学 7 研究科との連携大学院協定を結んでおります (<http://www.kek.jp/ja/Education/>)。さらなる拡充の可能性について伺います。

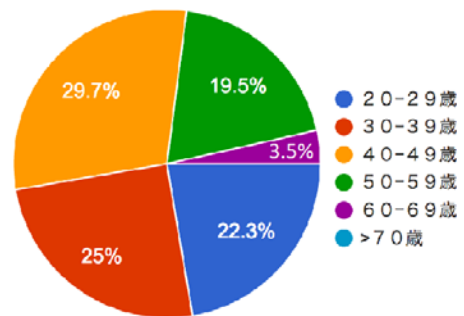
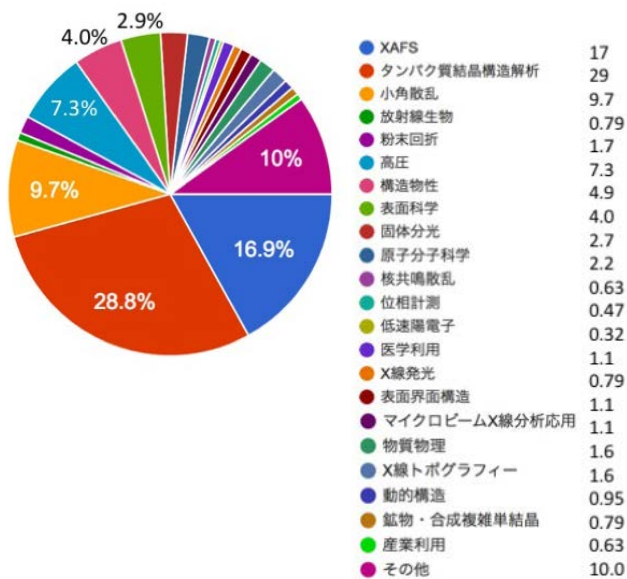
基本情報 (3) : 回答者の居住地域



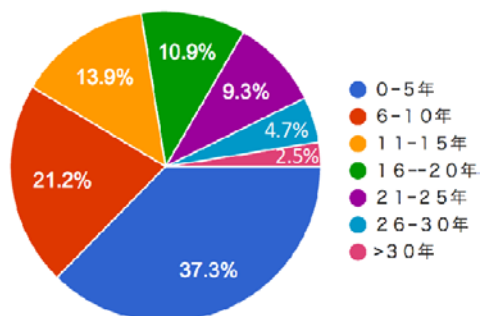
- 連携大学院制度等の活用に関して組織的協力が可能
- 連携大学院制度等の活用に関して組織的協力を将来考え得る
- 大学院教育 (講義, 単位認定, 互換等) に関して協力が可能
- 大学院教育 (講義, 単位認定, 互換等) に関して将来協力が可能
- その他の協力が将来可能
- 協力し難い

基本情報 (4) : 回答者の年齢層

基本情報 (1) : PF-UA 所属グループ



基本情報 (5) : PF の利用年数



### 平成 29 年度 第 1 回 PF-UA 幹事会・運営委員会 議事録

**日時：**平成 30 年 1 月 10 日 11:10 - 12:10

**場所：**つくば国際会議場エポカル小会議室 404

**出席者：**[幹事会] 平井光博（会長）、近藤寛（庶務）、植草秀裕（行事・書記）、清水敏之（行事）、米山明男（共同利用）[運営委員会] 足立伸一、兩宮健太、齋藤智彦、佐藤衛、三木邦夫、百生敦、村上洋一

- ・会長挨拶（平井 会長）
- ・議事次第紹介（近藤 庶務幹事）

#### 【報告事項】

- ・施設報告（村上 施設長）
- ・PF シンポジウム（量子ビームサイエンスフェスタ）  
関連日程（植草 行事幹事）
- ・PF-UA の集い議事次第の紹介（近藤 庶務幹事）
- ・その他（近藤庶務幹事）

賛助会員・企業展示の募集について、PF-UA 次期運営委員選挙中間報告、施設側事務全般を所掌する幹事の新設について、PF-UA 今後の予定についての報告と意見交換を行った。

- ・KEK と地方大学との教育研究連携について（平井 会長）

加の要望、KEK 放射光計画の継続的な推進であった。また、機構長からの回答も同 PF NEWS に掲載された。関連して、科学研究の将来について意見交換を行った。

- ・PF シンポジウム（量子ビームサイエンスフェスタ）関連日程（植草 行事幹事）

2017 年度量子ビームサイエンスフェスタ（第 9 回 MLF シンポジウム／第 35 回 PF シンポジウム）を共同主催している。開催日は 2018 年 3 月 2 日～4 日で、2 日夜に PF-UA ユーザーグループミーティング、3・4 日にポスターセッション（PF-UA は MLF 利用懇と共に学生奨励賞を提供している）、4 日に PF-UA 総会および PF シンポジウムを行う。

- ・その他（近藤 庶務幹事）

PF-UA 次期運営委員選挙中間報告として、運営委員候補として 30 名が推薦され、1 月下旬に本選挙を行う。PF-UA 今後の予定についての報告と意見交換を行った。

- ・自由討論（近藤 庶務幹事）

### 平成 29 年度 PF-UA の集い議事録

**日時：**平成 30 年 1 月 10 日 12:20 - 13:20

**場所：**つくば国際会議場エポカル小ホール 200

- ・会長挨拶（平井 会長）
- ・議事次第紹介（近藤 庶務幹事）

#### 【報告事項】

- ・施設報告（村上 施設長）

元物質構造科学研究所副所長・松下正名誉教授の訃報ご紹介（PF NEWS Vol.35 No.3）、共同利用実験関連（予算推移、運転時間、運転状況、G 型課題数推移）、共同利用成果（論文登録数推移）、共同利用強化、BL 整備関連報告、KEK 放射光に関連した将来計画、運転計画について報告を行った。

- ・PF-UA アンケート 2017 報告（平井 会長）

詳細は PF NEWS Vol.35 No.3 (Nov. 2017) に掲載した。目的、新設の項目について説明し、アンケート結果を順に報告した。アンケート内容を元に、2017 年 9 月 11 日に PF-UA 要望書を KEK 機構長に提出した。骨子はビームタイム増